

音楽語りという教養の「ため込み系/たしなみ系」

聖路加国際大学大学院看護学研究科・准教授
歌川 光一

巻頭インタビューより

本号の巻頭インタビュー「批評なき音楽語りという困難」（インタビュイー：ヒヤダイン氏、以下「巻頭インタビュー」と略記）中の話題には、教養のあり方をめぐる昨今の議論に引き付けて考えられる部分がある。

批評（解釈）嫌い

一つは、ソーシャルメディア時代に生じる批評嫌い、とりわけ解釈嫌いというような側面である。

速水（2022）の整理によれば、ソーシャルメディアのような双方向的な機能を有するメディアは、（マス・メディア時代に理想とされた）「一億総評論家」的状況（大宅壮一）を実現させる有意義な存在のはずだった（同上：56-57）。しかしそれがいざ普及すれば、「集合知」の実現というよりも「オルタナティブ・ファクト」の発生につながり、政治的分断や誹謗中傷という現象を生み出していく（同上：58-59）。そんな中、「共感を多く集める」ことの重要性が増し、その競争が激しくなると、「批評」は「共感」に相反する態度となり（同上：59-60）、「誰もが批評家になっているにもかかわらず、批評家が一番嫌われている」（同上：58）という状況が生まれているという。巻頭インタビューにおける、音楽クリエーターとしてのヒヤダイン氏の『批判』と『悪口』が混在して同じ意味になってしまう「調べる側が積極的に能動的に動いてそのネガティブな批評を拾っていかないと見れない」という所感とも関わってくる。

速水（2022）はさらに、作品を作ることに内包される批評性の一部である「解釈」は、文化多様性、他者の存在、「経験」を重視するソーシャルメディア世代の若者に、特権意識や作家主義の表れとして忌避される傾向を指摘する（速水 2022：60-63）。この点も、巻頭インタビューに登場する、音楽の背景を語ることが「マウント」として受け止められる、という点に表れてくる。

ファスト教養

一定程度以上、詳しくなった上での楽しみである「批評」とは異なり、いわゆる入門期にあたる音楽語りに関わって、近年「ファスト教養」という教養のあり方が話題となった。レジ（2022）によれば、「ファスト教養」とは、次のような教養のあり方を指すという。

「楽しいから」「気分転換できるから」ではなく「ビジネスに役立つから（つまり、お金儲けに役立つから）」という動機でいろいろな文化に触れる。その際自分自身がそれを好きかどうかは大事ではないし、だからこそ何かに深く没入するよりは雑に「全体」を知ればよい。そうやって手広い知識を持ってビジネスシーンをうまく渡り歩く人こそ、「現代における教養あるビジネスパーソン」である。着実に勢力を広げつつあるそんな考え方を、筆者は「ファスト教養」という言葉で定義する。（レジ2022：21）

冒頭インタビューにおいても音楽の選好をめぐるセグメント化の話題が挙がっているが、「ファスト教養」は、セグメント化を促進する原動力の一つとして、「ビジネスに役立つ」ということが関わってきてしまうことを指摘している。レジ（2022）では、音楽に関わり、リクルート、LINE、ZOZOなどで要職を務めてきた田端（2019）が、音楽ユニットのフリッパーズ・ギターについて知っていた大学生に面接で高評価を与える描写を紹介していることや、日本のフリースタイルラップのトップランカーである晋平太氏が音楽ジャンルとしての魅力ではなく「ビジネスに役に立つ」という側面にフォーカスしたラップについての書籍を刊行していること、などを「ファスト教養」の例に挙げている（レジ2022：12-13,19-21）。

レジ氏が「ファスト教養」問題について考え始めたバックグラウンドも、本誌の今回の特集の趣旨からして興味深い。企業に勤める一方、個人として音楽ブロガー・ライターとして活動しており、後者においては、ブログをきっかけに商業媒体で執筆する機会を得、日本の音楽シーンに関する批評を発信しているという（同上：8）。そこで、「一般のビジネスパーソンの世界ではファスト教養が相応の支持を集めており、片や音楽業界のようないわゆる『文化系』の領域では〔中略…引用者〕インフルエンサーに対する嫌悪感が渦巻いている」状況に気づいた、ということである（同上：9）。レジ（2022）は、実はかつてファスト教養に染まっていた自己反省も踏まえつつ、ファスト教養の世界に通底する、自分の狭い基準で「無駄か無駄ではないか」を勝手に判断してしまう態度について読者に投げかけている（同上：181）。

古くて新しい、教養の「ため込み系/たしなみ系」

竹内（2004）は、旧制高校と旧制高等女学校の教養のあり方を、「ため込み系/たしなみ系」として対比させ、「ひけらかし」というよりは、無償の知が誘因となった後者の教養の形の可能性について述べ

ている。この対比は、文化・芸術作品やパフォーマンスの発表、それをめぐる語りや語りの評価のシェアが技術的に容易になった昨今も、重要な意味を有しているようである。すなわち、音楽をめぐる「批評嫌い」問題からは「ため込み系」のペダンティックな側面が、「ファスト教養」問題からは、本来「○○としての」という分別を要求する「たしなみ」（拙稿 2021）に「ビジネスマンとしての（たしなみ）」という分別が滑り込む状況がうかがえる、ということである。

Hobby としての「趣味」は、個々の選好に委ねられる自由な生活行動とみなされる反面、それが語りの対象となりまたその語りが共有されるとき、のっぴきならない問題にもなり得る、ということなのだろう。

付記

本稿執筆にあたり、サントリー文化財団 2022・2023 年度助成「学問の未来を拓く」「『趣味』の昭和史の構築—シリアスレジャーの観点による生涯学習論の刷新に向けて—」、稲盛財団 2023 年度助成「生涯学習政策におけるシリアスレジャーの位置づけ方をめぐる日米比較」の助成を受けた。

参考・引用文献

速水健朗（2022）「なぜ批評は嫌われるのか—「一億総評論家」の先に生じた事態とは」『中央公論』136（4）、56-63.

大和田俊之（2021）『アメリカ音楽の新しい地図』筑摩書房.

レジー（2022）『ファスト教養—10 分で答えが欲しい人たち』集英社.

晋平太・監修（2021）『教養としてのラップ』自由国民社.

田端信太郎（2019）『これからの会社員の教科書』SBクリエイティブ.

竹内洋（2004）「教養主義から学び社会へ—たしなみ系とため込み系」『月刊国民生活』34（1）、10-13.

歌川光一（2021）「アマチュア「稽古（事）」と「たしなみ」」宮入恭平・杉山昂平編『「趣味に生きる」の文化論—シリアスレジャーから考える』ナカニシヤ出版,pp.11-20.